

特集

本棚をめぐる冒険

本棚はわたしの脳内。たまに森。ときどき宇宙。
それは住居や仕事場にいつもあって
希望と想像力の風が吹く。

長年かけて集まってきたものも
今日運命的に出合ったものもあり、
すべてが混沌として果てしなく、
終わりが無い場所なのかもしれない。

17組の、“人生と本棚”をめぐる冒険へ。
積みあげ、重ねてきたものが、人生だ。

本棚に潜る。

気の向くままに置かれた1冊も、いつの間にかとり着いた1冊もある。本棚の森に深く潜ってゆくほど、会話するより、その人のやわらかい部分に触れられる気がした。棚のセオリーやルールを尋ねるのは野暮かもしれない。「好きなものを並べているだけ。解釈なんてできないよ」と、困らせてしまうだろうから。



絵本という窓から
豊かなこの世界を
見つけていきたい。



リビングからひとつながりのフロアリングの部屋。壁一面を埋め尽くす本棚には、母娘が長い年月をかけて大事に育ててきた、児童書への愛がぎゅっしり押し込められていた。『ももたろう』『いっすんぼうし』『おむすびころころ』…いつか手にとったはず、読んでもらったはずのタイトルを口に出すだけで、こころがふっと軽くなる。そして、誰かを愛し愛された「感覚的な」想い出もわりと蘇ってくるから、絵本は不思議だ。2年前に完成したという中山家の本棚は、木の風合いがあたりたたく、まるでずっと昔から家の一部だったかのような佇まいにあふれている。本棚は、合志市に工房をもつ家具職人・門岡幸征さんが手がけたもの。門岡さんが以前長崎書店の書棚を手がけていた縁から、同書店ではたらく理紗さんの紹介により、オリジナルの本棚が実現した。

「娘が大学で児童文学を専攻していて、毎日とっても楽しそうだったんです。私もここで学びたい!」と思って、熊本を飛び出しました。母となり、学生となって改めて児童文学の魅力に出会いなおした美加さん。理紗さんがフェリス学院大学文学部に在学中、「衝動的に」同大学に入学。46歳で女子大生となり、そのまま修士課程まで進んだ。そこから絵本セラピストの資格を取得し、熊本の学校や図書館、がんサロなど絵本セラピー®を開催したり、近所の公民館に「みずべ子ども文庫」を開設したり。

もっと読んで読んで!



私の本棚

KEY WORD_1

大切なものを見失わないための本棚

美加さんが児童文学を学びはじめた大学時代からどんどん増えていった絵本。国内・海外の名作から、子ども大人もこころの支えになるもの、くすくすの幸福感に包まれるものまで、世界を自由に見つめる目を養ってくれる。取材は8月。すぐ目に入る場所に立てかけられていたラインナップは、『生きる』『あついあつい』『へいわってどんなこと?』など。ここには、季節や時事を映した「今読みたい絵本」が並ぶ。



中山 美加さん・豊留 理紗さん

熊本地震支援をもとに開設された「みずべ子ども文庫」(熊本市)を運営する美加さんと、大人が絵本を楽しむ「大人絵本会」を積極的に開催する娘の理紗さん。現在、長崎書店を育児休業中。母娘ともに絵本セラピスト®だ。

「もともと家庭文庫は、熊本地震後の支援をもとにはじめたもの。『しろくまのパンツ』で知られるtupera tuperaさんや、『スーホの白い馬』の赤羽末吉さんの息子のお嫁さん、『わにのなみだはうそなきなみだ』翻訳のふしみさをさんなど、たくさんの方にも本を届けていただいて。絵本業界に関わる様々な方から預かったのは、絵本であり「希望」といえるだろう。「大人だからこそ読み取れる視点や角度ってあるんです。それを体現しているのが『絵本セラピー®』なんです。絵本についてみんなで語り合う時間って、本当にしあわせだなと思っています。私ってこういうことを考えていたんだ! 本当はこんな想いだったの?と、隠れていた内面に気づくことができるから」。

紙の印刷物の不況が続くなか、絵本の売り上げは好調だ。「ジャーナリストの柳田邦男さんはね、こう言っています。人生で、絵本との出会いは3度あると。まずは幼少期、次に親として、そして最後が年齢を重ねたときです」。同じ絵本でも、人生のステージによって、その読み取り方・感じ取り方は変わる。「大人が絵本のよさに気づかないと、子どもにそれを渡してあげることができない。私はいつもそう考えているんです。だから大人にこそ絵本を読んであげたいし、大切なものに気づいてほしいなと思っています」。

桃太郎にも読んであげよう!



桃太郎

読み、書き込み、
本と一緒に眠る。



好奇心を掻き立てられる本棚だ。第一印象は、自身のもつ空気を象徴するように濃くして静謐なのに、ぐっと中に入り込むと、どこか隙があってチャーミング。「下段のスペースは、うちのリノベをしてみたら、工務店のお兄さんに頼んで棚をつくらせてもらいました。こもろちゃってきれいに整理できんかなって相談して(笑)」。誰も立ち入らない寝室というプライベートな空間にある本棚は、いわゆる「秘密の花園」。その人そのものだと思った。

東京・六本木にある青山ブックセンターの書店員時代、料理家・細川亜衣さんに惚れ込みリターン。「この人のところで働きたいと思い、なかば強引に熊本に戻ってきました。『追っかけ』のようなもの(笑)」。それから長崎次郎書店勤務を経て、晴れてへろ(s)on(ん)のスタッフに。棚に目をやると「うちのおつけもの『ふだんの洋食』『台湾小麦粉料理』…」

食の可能性を広げる料理本は、創造性豊かな料理のヒントに欠かせない。なかでも、『食記帖』『果実』『野菜』など、師である亜衣さんが手がけた本は、平山さんにとって特別ななごめきを放っている。「亜衣さんのレシピは感覚的なので、色々忘れないように自分なりの解釈や気づきを書き足しています。付箋が貼られたそれをのぞかせてもらうと、直筆でびっしり書き込まれたメモに驚かされた。

「亜衣さんが作って最高に美味しかったと言っていたので、作ってみる」 「おたまたまから流し入れたそのままの厚みで焼いた。それもそれで美味」。繰り返し読み、書き込み、使い込んでいく。また読んで、書いて、深いところまで潜っていくあたりらしい読書術に触れたようで、しばらくそのレシピを眺めていた。

あれもこれも書きたくなる〜



亜衣さんの『パスタの本』も付箋がびっしり!

私の本棚

KEY WORD_2

奥深いところまで 潜りこむための場所

寝室にある押し入れスペースを生かした本棚は、平山さん独自の感覚で捉え、レイアウトされたもの。大半を占めるのは、料理本やこれまで大切にしていたレシビだが、『ecocolo』『ku-nell』『TRANSIT』などライフスタイル&旅の雑誌やお気に入りの漫画も多い。ベッドにもたれ、お気に入りの飲みものと一緒にたのしみ読書時間が、至福のとき。



その静かな

「熱狂」に、

境界線はない。

池波正太郎、伊丹十三、開高健など昭和に活躍した作家の文庫本や、ビジュアルブック、料理本、エッセイなどが存在感たっぷり



料理も得意だよ

並んでいる。「駅弁の丸かじり」からは「うまい』『酒肴奇譚』など食や酒にまつわる本も多く、タイトルを眺めているだけでお腹がぐうと鳴ってしまっただ。たとえば新刊と古本、時代や作家別などの境界線を一切もたない本棚は、そのまま中村さんの頭のなかをのぞきこんでいるようで面白い。小説に夢中になった少年期・編集者時代に見る目が養われた青年期を経て2児の父と

なった中村さんは、近頃はいわゆる小説を読まなくなったという変化を語ってくれた。「なぜかという、子育てがストーリーの宝庫だから。いまは、ほかの人の書いたあたらしい物語を必要としないんだと思います」。

やわらかな畳をしっかりと踏みしめ、混沌とした秩序で折り重なった本を改めて見つめた。それはみっしりと、地層のように積み重なった、中村さんの「記憶の引き出し」ともいえるかもしれない。古い木製の本棚に集積された本は、コレクションのごく一部。「住む場所もはたらく場所も変わってきたけど、僕は基本的に本を捨ててこなかったんです。ただ、棚を整理しているわけではないので、あれが読みたい」と思っても探すのにひと苦労(笑)。でも自分が集めてきたものが、自分の子どもたちだったり、きつとどこかにつながると思ってるところはあるかもしれないですね。棚でありながらひとつのメディアのようにもみえたそれは、自店「Vertigo」同様、終わりなく「編集」され続けていく場所なのだろうと感じた。



私の本棚

KEY WORD_3

秩序としての混沌さが 生きた感性の棚

リサイクルストア「ONE PLUS ONE」(阿蘇市)で購入した古い本棚。少しずつ買い集め並べられた本は、小説、写真集、雑誌とまったく脈絡がないようで、1冊1冊との出会いをちゃんと自らの言葉で語れるのが、中村さんらしい。自宅は、妻の啓美さんが営むマッサージ店でもあるため、本好きなお客さまが本を借りて帰ることもあるという。



中村 慎さん

白川公園裏っかわのビル3Fにある「好きなもののみを選ぶ店」Vertigo(熊本市)の店主であり、編集・ライターとしても長いキャリアをもつ慎さん。音楽、映画、アートなどカルチャー全般をこよなく愛する、偏愛の人。

本棚の美学も知る。

本棚は時に、そのひとを映す「鏡」となる。
本を愛してやまない4人の読書家は、
何を読んで、何を感じて、生きてきたのか。
偏愛に満ちたその棚が、私たちの胸を高鳴らせる。

イラストレーターの本棚

なかしま ゆみさん

applelandの屋号で活動するイラストレーター・デザイナー。手芸や編みものなど手を動かすことが好きで、将来の夢は手芸屋さん。読んだ本を記録管理するアプリ「読書メーター」を愛用中。



書店員の本棚

三瀬 弘泰さん

高屋書店を運営するニューコ・ワン(株)所属の熱狂的&名物SFファン書店員。ビブリオバトルやSF読書会などをリアルとオンラインで主宰する。日本SF作家クラブ会員(書店員で初選出!)



館長の本棚

安永 秀樹さん

菊池川をイメージした知の清流「ブックリバー」で知られる「菊池市中央図書館」の館長。菊池、本、人を愛する、明るく豪快な人柄。モットーは、「TTPS(徹底的にバクって進化させる!)」



画家の本棚

上野 美樹さん

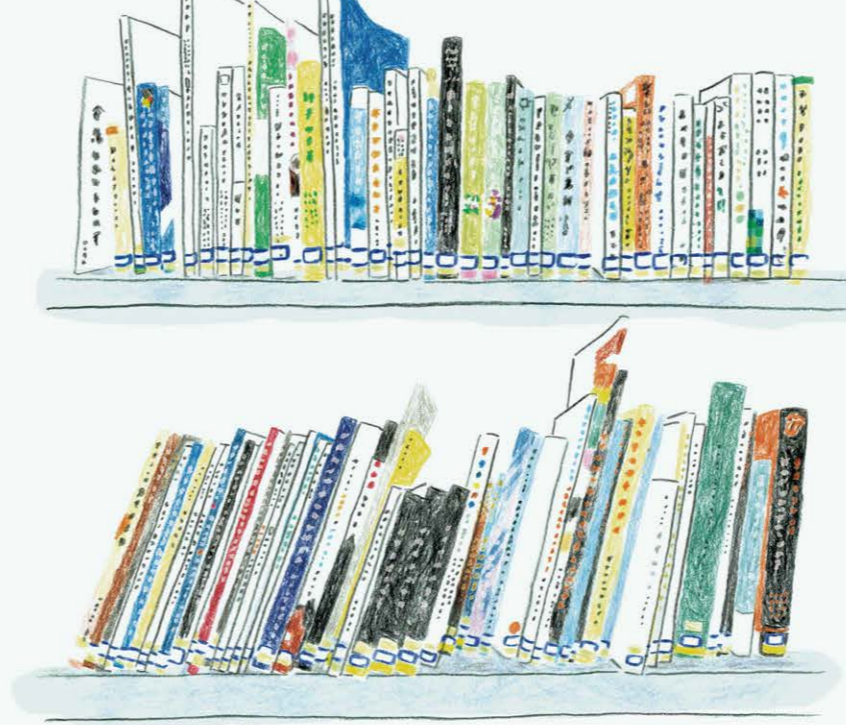
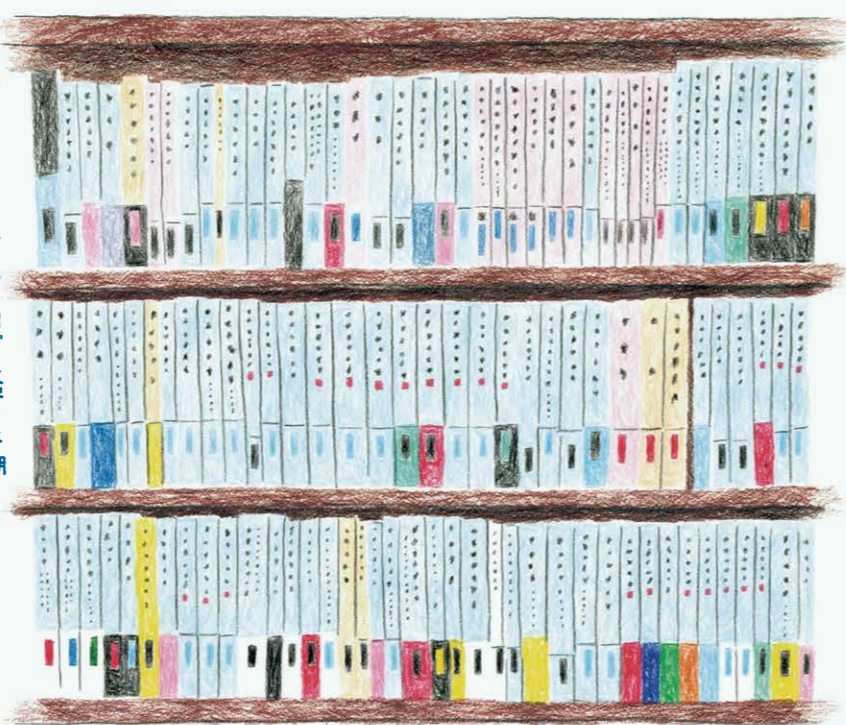
東京藝術大学卒業後、北海道にあるランドスケープデザインの会社に入社。結婚して独立後は画家として活動する傍ら、熊本市内で絵画教室を主宰。親子で日々の衣食住を丁寧に重ねる暮らしを実践中。



帯は外さず買ったままの状態をキープするのこだわり。



あまりにも、あまりにも店なしで危険な本棚!



「この本、館長の本棚にありますか?」というお尋ねもたまにある。



壁一面の本棚は建築家であるイラストの手作り。

シンプルで合理的、というロマン。

日頃から、SNSなどで人の本棚をながめるのが好きなんです。本屋さんの本棚を観察するのも好き。だからうちの本棚も本屋さんみたいな感じにしたいくて、作家名別(50音順)を出版順に並べるといふ謎のこだわりのもと、ピシッと整理しているのが特徴。キッチンにある本棚に小説と漫画、リビングに置いてあるのに演劇や手芸、編みものなど趣味の本を置く感じ。好きな作家さんの新刊は必ず買いますし、初版を買いたいという譲れない部分があるので、もう年々積み重なっていっちゃって。名前をあげるとキリがないですが、特に西加奈子さん、吉田修一さん、伊坂幸太郎さん、本谷有希子さんなんか大好きですね。読むのが追いつかないから、いまや2019年くらいのもを読んでいるんですよ。現時点で読めていない本が100冊以上あるんじゃないかな。ああ、本のために引越したい…!

世の中には「物語を必要とする人」としない人がいると思いますが、私はエッセイやドキュメンタリーより、「誰かによってつくられた物語」を求めている人なんですよね。だから、ドラマ感のある小説が好き。友人たちにも「ゆみセレクトのものを」といわれるので、その人に合ったものを貸すことも多いです。でも、自分には人に借りるのは苦手(笑)。何か感想言わなきゃいけないかな〜とか思っちゃって。私、めんどくさいこだわりばかりですね。

選書紹介 子どもたちに貸したい小説3冊

『静かに、ねえ、静かに』 本谷有希子/著
「SNSをテーマにした短編集。これぞ本谷節! ヒリヒリします(笑)」
『いちごの唄』 岡田恵和・峯田和伸/著
「銀杏BOYS」の楽曲をもとに生み出されたビュアラブストーリー。
『ときどき旅に出るカフェ』 近藤史恵/著
「こんなカフェが近くであれば、旅をした気分になりますね」



選書紹介 繰り返しばらくSF小説3冊

『ニューロマンサー』 ウィリアム・ギブスン/著
「サイバーパンク」と呼ばれ、世界中でセンセーションを巻き起こした1冊。
『闇の左手』 アーシュラ・K・ル・ギン/著
『ゲド戦記』の作者によるSF長編。両性具有の美しいラブストーリー。
『虎よ、虎よ!』 アルフレッド・ベスター/著
50年代SFを代表する鬼才による古典的名作!



“なんか気になる”が見つかる私的な棚。

自分の想像を超えた視点や気づきを与えてくれるのが読書体験で、図書館はそんな世界への道しるべであつたらいいと思っています。当館の代名詞は「ブックリバー」とよばれる菊池川をイメージした流線形の本棚で、生まれ出た知恵の一滴が川のように集まり流れ、大河となって大海に注ぐイメージをデザインしたもの。いわゆる従来の「まちの図書館」のセオリーにとらわれない本棚。自由で、感覚的で、本そのものがパンと主張してくるような並び。図書館であり本屋のよう、というのかな。ここに来たら何かがあると思ってもらえるような、ひらかれた場でありたいと常に思っています。

そんなブックリバーの脇にこっそりと設置されているのが、ずばり「館長の本棚」(笑)! これ、ぜんぶ自分で買って寄贈している本なんです。好きな本をどんどん持って来ておいていたら、スタッフが「もうここを丸ごと館長の本棚にしたらどうですか?」とスペースをつくってくれました。本屋めぐり、SNSを徘徊し、おすすりされた本を仕入れて、どんどん新書も追加します。ビジネス書、エッセイ、アートブック、洋雑誌、ZINE…意外とどんなジャンルのものもあるんですよ。数は、もうわからないなあ。題字でも、目次でも、書かれた1節でも。どこかの何かにひっかかってくれたらうれしいな。表紙をひらいて、一行でもことばに触れたら、それは読書といつていい。私はそう思っているから。

選書紹介 多言語でまどめ買ったアートブック

『THE SKETCH TRAVEL』
イラストレーターの堤大介氏が企画立案した、壮大な「あそび」といえるプロジェクト。1冊の赤いスケッチブックが4年半以上の歳月をかけ、71人の作家たちへ手渡してまわされ、実に12カ国をリレーした奇跡の記録。「館長の本棚」には、この日本語版・フランス語版・英語版の3冊がある。



キャンパスのような暮らしの本棚。

暮らしのなかにはいつも絵を描くこと、手を動かすことがあります。“生活のスケッチ”がうまくいかない日もたくさんあるけど、自分が好きだなと思えるものに気づけると、切り替えがスムーズにいく気がするんです。たとえば天草の海で拾ったウミウチワ、イルカの骨、錆ついた鉄の輪っか…拾ったり譲り受けたりした、自分にとって捨てられないモノたちが、暮らしの彩りになる。特に煮詰まった時ほど、そういう存在の大切さを思いますね。

子どもが生まれてからは生活自体をもっと大切にしたいと思うようになりました。食べること、生活すること、自然と関わること。衣食住の繰り返しのなかで私たちは生きているけれど、丁寧にやろうとするとこれが結構むずかしくて(笑)。今回ご紹介した羽仁もと子さんの著書はパイプルのように手元に置いて、思うようには進まない日常でも、本質を見失うことなく、いかに軽やかに過ごせるかを学んでいます。

本棚には子ども好みの本もあり、必ずしも自分の好きなものだけを置ける場所ではないけど、家族の好みや価値観、過ごした時間が、本棚の中でゆっくりと混ざり合ってゆく。それもいいかなと思います。本棚は宝ものを飾る場所であり、気分を切り替える場所であり、家族の時間の蓄積そのもの。今の暮らしを深めるために、我が家に欠かせないものですね。

選書紹介 暮らしを深めるための3冊

『園芸家12カ月』 カレル・チャペック/著
北海道でランドスケープデザインの仕事をしていた頃を買って以来、折に触れて読み返す1冊。
『羽仁もと子著作品集』 羽仁もと子/著
日常生活の本質を見失うことなく、いかに大切にできるかを説いた本。
『物物』 猪熊弦一郎/著
猪熊さんがインスピレーションを得たモノをスタイリストの岡尾美代子氏がスタイリングした図録。



飲食店の本棚。

「いやあ恥ずかしい場所ですよねえ、本棚って」。

飲食店に置かれてある本棚が、気になってしかたない。棚の大きさ、素材、重なり方。そして何より置かれてある本。じっくり拝見していると、店主の知と熱にふれ、あらためてこの店に惚れなおす(かもしれない)。

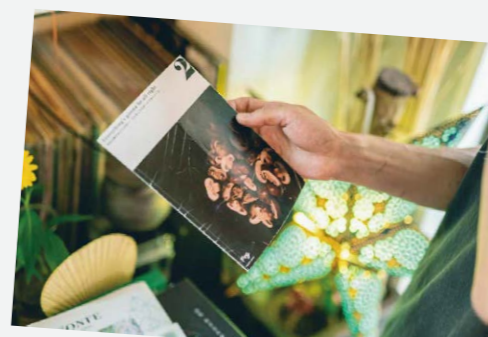
知って食べて噛み締める。飲食店に見つけた知の種。

「俺ら夫婦は、もうめっちゃくちゃ本を愛してるんすよね。開口一番そうつぶやいたのは「Peg」のオーナーシェフ・富永博美さん。妻のみなさんは、博美さんがいうところの「活字中毒」で、出会ったときから本を手放せない人」だそう。なんと富永家には、この店の20倍ほどの本があるらしい。愛してやまないボブ・マーリーの本が面出しされた棚は、カードやレコード、ちいさな絵、不思議な石やオブジェなどが無造作に置かれている。無遠慮でパンク。けれど「出合ってきたものをなかつたことにしない」やさしさと、ふだんはカウンターの奥で隠れがちな、メラッとした熱がこぼれ落ちる場所に見えるのは、私だけではないと思う。



「食べものは直接からだの栄養になるけど、本は「こころの栄養」になるものなのかもしれない」。水前寺のイタリアン食堂「ココツツア」ホール担当・高岡風実さんにとって読書は「あたり前の日常」。なにせ、仕事と生活の時間以外をほとんど読書にささげているくらいだ。「ほくの鳥ちゃん」「モモ」「星の王子さま」…カウンターの両端にそっと置かれた木箱の本、ちいさなスウィーツケースに積まれた絵本は、やさしい世界にどっぷり浸かれるラインナップが印象的。この穏やかな店と本の理想的な関係をあらわしているようにも見える。同時に、ずっと本と生きてきた高岡さんを支えてくれる「お守り」のような存在なのかもしれないと感じた。

大の村上春樹ファンでもある高岡さん。「日本人に生まれてよかったことの1つが、村上さんの小説のオリジナリティをそのまま味わえること！ 贅沢だなあと」。



「Peg」では毎年年末に自主制作のZINEを発行(写真)。おせちを買った方しか手に入らないレアさと「俺たちが好きなことを知ってほしい」ロック精神がたまらん。

店の「本担当」としてもっと進化させるぞ！



B

「本は、こころの栄養になるものなのかな」。

イタリアン食堂
ココツツア

DATA
☎096-387-1039
熊本市中央区水前寺6-27-4
営業時間 11:30→15:00/17:00→21:00
定休日 土曜



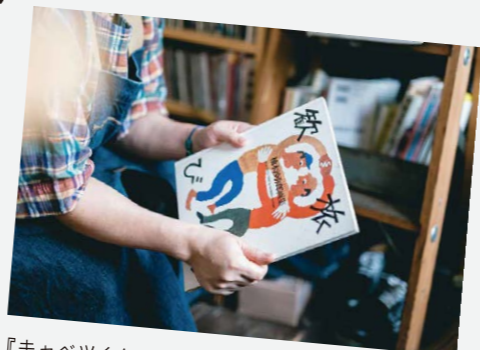
芥川龍之介や宮沢賢治など、短くて面白い話がたくさんある明治期の作家さんのラインナップを今後増やしていく予定だそう。待ち時間にもぴったり。



「ものごとはとてもシンプルだよ」。

picnic

DATA
熊本市中央区城東町5-18 2F
営業時間 14:00→23:00
(営業日はSNSで確認を)
☎chaos.picnic



『キャベツくん』をはじめとする長新太さんの絵本や『棒がいっほん』の高野文子さんの漫画のファン。柚木沙弥郎さんの画集『旅の歌び』は特に気に入る。



店主に会いにくる人も多い。「うちはただお酒を飲んでごはんを食べるだけというカテゴリーとはちがうかも。小さな子どももよく来るし、居場所」というのかな」。



「あまり難しい文章や硬すぎると本は読めんけど、かおるちゃんは今余白や行間を読んでいるんだね。『お守り』にいわれたんだよ。熊本城近くの時計台2Fにある「picnic」は、決してすべてのひとにオープンな店とはいえない。でも一定のひとたちにとっては深呼吸でき、山の中腹にある小屋のようにひと休みができて、また、歩き出すことができる。総じて「保健室」のような場所だ。中島らもがあり、コジコジがあり、原発に関する本がある。カウンター下にある本棚は、かおるさんとここに集まる「ちよっと特別な人生を歩んできた」お客さんが少しずつ持ち運んでレイヤーのように積み重ねてきた、現在進行形の場所。



お客さんが持ってきた本も多いのよ

D

「この店には本物しかない。だから、どうしようもなく好きなんですよ。ね。いわずと知れたフレンチの名店「ケルンよしもと」の4代目オーナーシェフをつとめる入馬道成さんは、36歳で本格的に修行をはじめた遅咲きの料理人。店の本棚には、料理の本や酒の本、旅の雑誌などがリスムよく並べられているが、入馬さんにとって最も特別な1冊が、和・洋・中の食べものに関することばを約3000集めた『食物事典』だ。「2代めにこれだけは読んでおいて教わったもの。この、前書きが秀逸なんです。料理人であるまえに人としてどうあるべきかが書かれてある。折にふれて何度も読み返します。師匠から引き継がれるものは、料理だけじゃないことを知ったエピソードだった。」

E

ハヤシライス ウィズブックス!



「店を始める前から夫婦で読んでいた、道具をテーマにした本や、コーヒーやワインの本。暮らしをテーマにしているお店だから、自然と好きな物に偏っちゃった」と笑うのは、甲佐町商店街にある雑貨店「NEWOLD」店主の米原明子さん。カフェカウンターのそばにある無骨な本棚は、ミリタリーショップで見つけたもの。かつてスウェーデン軍で使われていた大きな箱のなかに、器や道具、料理などの暮らしにまつわる本が詰め込まれている。商品の知識と想いを深めるために、いままも日々読んでいるという本。名物のハヤシライスを食べながら、じっくりめくってみたい。



アンティーク雑貨や気鋭の作家が手がける器など、名前の通り古いものと新しいものが並ぶ店。「コーヒーだけでもお気軽に」。



NEWOLD

DATA
☎080-3376-0553
上益城郡甲佐町岩下131-1
営業時間 11:30→16:30
(土・日曜は11:00→18:00)
定休日 火・水曜
☎newold_kumamoto

「好きなものに偏るのは自然なことだね」。

E

大学時代に同店でバイト後にIT業界へすすんだものの、どうしても夢がきらめききれず、ケルンの門を再びたたいたという情熱の人。



大学時代に同店でバイト後にIT業界へすすんだものの、どうしても夢がきらめききれず、ケルンの門を再びたたいたという情熱の人。

ケルンよしもと

DATA
☎096-356-9895
熊本市中央区下通1-4-5 熊本ビル2F
営業時間 11:00→14:45/18:00→22:00
定休日 火曜
☎kerunyoshimoto1967



スウェーデン軍の古箱には、道具の本、料理の本、日用品の本がざくざく。自分が読んでいた本、好きな本が中心に置かれ、お気に入りは何度も読み返す。

本棚をめぐる冒険 ↓ 飲食店の本棚。



エピソードが宝もの!

D

「引き継がれるのは料理だけじゃない」。



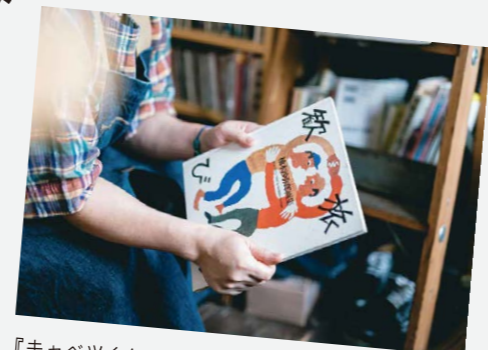
店内のいたるところに本が置かれたスペースがあり、ワインの木箱を活用したのも。読書家だった3代めが残っていた本も多いという。



大学時代に同店でバイト後にIT業界へすすんだものの、どうしても夢がきらめききれず、ケルンの門を再びたたいたという情熱の人。



C



『キャベツくん』をはじめとする長新太さんの絵本や『棒がいっほん』の高野文子さんの漫画のファン。柚木沙弥郎さんの画集『旅の歌び』は特に気に入る。



店主に会いにくる人も多い。「うちはただお酒を飲んでごはんを食べるだけというカテゴリーとはちがうかも。小さな子どももよく来るし、居場所」というのかな」。



「あまり難しい文章や硬すぎると本は読めんけど、かおるちゃんは今余白や行間を読んでいるんだね。『お守り』にいわれたんだよ。熊本城近くの時計台2Fにある「picnic」は、決してすべてのひとにオープンな店とはいえない。でも一定のひとたちにとっては深呼吸でき、山の中腹にある小屋のようにひと休みができて、また、歩き出すことができる。総じて「保健室」のような場所だ。中島らもがあり、コジコジがあり、原発に関する本がある。カウンター下にある本棚は、かおるさんとここに集まる「ちよっと特別な人生を歩んできた」お客さんが少しずつ持ち運んでレイヤーのように積み重ねてきた、現在進行形の場所。

D

「この店には本物しかない。だから、どうしようもなく好きなんですよ。ね。いわずと知れたフレンチの名店「ケルンよしもと」の4代目オーナーシェフをつとめる入馬道成さんは、36歳で本格的に修行をはじめた遅咲きの料理人。店の本棚には、料理の本や酒の本、旅の雑誌などがリスムよく並べられているが、入馬さんにとって最も特別な1冊が、和・洋・中の食べものに関することばを約3000集めた『食物事典』だ。「2代めにこれだけは読んでおいて教わったもの。この、前書きが秀逸なんです。料理人であるまえに人としてどうあるべきかが書かれてある。折にふれて何度も読み返します。師匠から引き継がれるものは、料理だけじゃないことを知ったエピソードだった。」

E

ハヤシライス ウィズブックス!



「店を始める前から夫婦で読んでいた、道具をテーマにした本や、コーヒーやワインの本。暮らしをテーマにしているお店だから、自然と好きな物に偏っちゃった」と笑うのは、甲佐町商店街にある雑貨店「NEWOLD」店主の米原明子さん。カフェカウンターのそばにある無骨な本棚は、ミリタリーショップで見つけたもの。かつてスウェーデン軍で使われていた大きな箱のなかに、器や道具、料理などの暮らしにまつわる本が詰め込まれている。商品の知識と想いを深めるために、いままも日々読んでいるという本。名物のハヤシライスを食べながら、じっくりめくってみたい。



アンティーク雑貨や気鋭の作家が手がける器など、名前の通り古いものと新しいものが並ぶ店。「コーヒーだけでもお気軽に」。



NEWOLD

DATA
☎080-3376-0553
上益城郡甲佐町岩下131-1
営業時間 11:30→16:30
(土・日曜は11:00→18:00)
定休日 火・水曜
☎newold_kumamoto

橙書店

著者への温かい眼差しを感じる拠り所。

「小さい本屋だから、棚には“似た人”を基準に並べます。著者がどんな社会背景に育ち、誰に影響を受け、何について書いているのか。深い考察がそこにはある。ジャンルでも内容でもなく“人”と言い切るところにらしさが滲む。背表紙を追ううちに「この本棚は自分のためにあるのだろうか?」と錯覚してしまうのは、紛れもなく店主の編集力の賜物だ。



カウンターの内側にある棚には、画家の黒田征太郎さんから届く直筆の絵巻書が何枚も。



店主の繊細な感性によって紡ぎ出される人と本の縁の輪は、全国に広がっている。



郷土の文豪たちが寄稿する『熊本風土記』は、お客さんから託された宝もの。

DATA 096-355-1276 / 熊本市中央区練兵町54 営業時間 11:30-19:00 / 定休日 第3月曜、火曜

my chair books

ZINEと新刊と音楽。4坪の空間で“今”を語れ。

上乃裏で書店を営んでいた店主が、3年の時を経て、新たに熊本市西区にある複合施設「243」の一角に店をかまえた。「コロナ禍で、改めて場の大切さを感じました。この場所や本を通じて、社会のさまざまな出来事を通じ、目につくようになった。まずは、目に触れることが大事だと思っただけで、気軽に足を運んでもらえたらうれしいですね」。



店主は、2つのバンドを掛け持ちする現役のバンドマン。音楽愛溢れる棚も必見。



市民コレクティブSakumagが刊行する『We act!』などZINEも豊富。

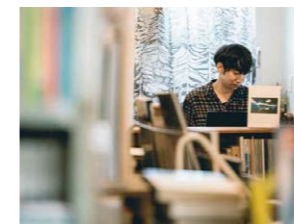


店内でひときわ目を引く美しい装丁の絵本は、アートとしてそのまま部屋に飾って眺めたい。

DATA 熊本市西区田崎2-4-33 1F 営業時間 10:00-21:00 / 定休日 火曜 mychairbooks

日常を見つめる視点が変わる場所。

熊本を中心とした九州の郷土史、映画や美術書、『宝島』や『Hot Dog』などの古い雑誌が所狭しと並ぶ。古くは江戸時代の書物から現在に至るまで、時代背景や当時の人々の価値観まで何える古書は、インスピレーションの宝庫。店主いわく「生きる世界を広げる手段の一つ」として、本があることを教えてくれる秘密基地のような空間だ。



東京で演劇を学んでいた店主。山鹿で開催される「大山鹿古本市」の主宰でもある。



銭湯で靴箱だった棚の中に文庫本が収まっているなど、味わい深いディスプレイにも注目。

DATA 090-8353-7662 熊本市中央区菜園町1-3 壺東ビル1-2号 営業時間 13:00-19:00 / 定休日 水曜 huruhon_takeshima



坂本龍一が表紙を飾る『宝島』が時代性を物語る。

カルチャーのいのちを繋ぐ経路地。

店主は東京の古本屋とレコード店に10年以上勤めた経歴の持ち主。「未知の本やレコードに出合えるのが、この仕事の大きな醍醐味のひとつです。開業からやがて6年。「汽水社」の本棚に共感した人々が、次なる持ち主を求めて本やレコードを持ち込む循環の中に店はある。“モノ”としての存在が薄れつつある時代だからこそ、カルチャーは巡るのだ。



「色んな事情でモノを手放そうと思ったときに、気軽に相談してもらえる存在でありたい」と店主。



レコードやアートブックなどカルチャーの棚が特に充実。

50年代英国の空気が詰まったロジャー・メインの写真集はおすすめの1冊。

DATA 096-288-0315 熊本市中央区城東町5-37ビューアーズ夢大ビル1F 営業時間 11:00-21:00 / 定休日 木曜 kuisuisha

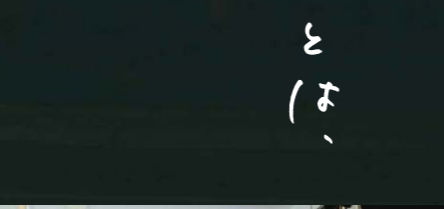
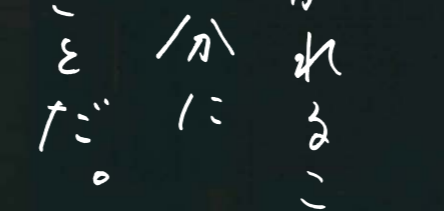
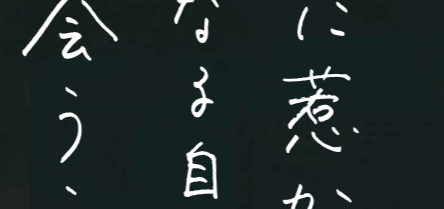
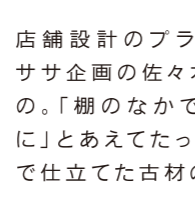
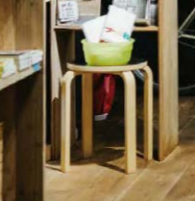
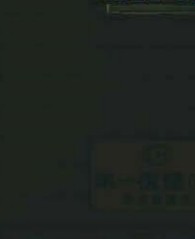


町の本屋パトロール。

店主の脳内読書マップが映し出された店の本棚は、今日も私たちの読書欲をかきたてる。果てしない本たちとじっくり向き合いたい町の5軒へ、いざ。

本に惹かれることは、内なる自分に会いに行くことだ。

古本と新刊 scene



本棚をめぐる冒険 ↓ 町の本屋パトロール。

今年7月にオープンした「scene」は、店主の高岡浄邦さんの愛着ある蔵書と新刊本で構成された、堀り甲斐のある本屋だ。「内容の関連性で並べる」という本棚には、背表紙の山が凸凹とした線を描く。「選書はいつも感覚的。背表紙の佇まいから入るんです」。不意に本棚から取り出した1冊は、レイモンド・マンゴーの名著『就職しないて生きるには』。高岡さんは、20代後半に出合ったこの本に大きな影響を受けた。「この1冊があるからこの本が生まれたんです」。続けて同出版社から刊行されたシリーズを取り出す。口数は多くない店主だけれど、本のことを尋ねれば、本と本の間に連続と流れる文脈が見えてきた。

実店舗を持つことを決めた。「今の時代に本って売れるの?」って思う人もいると思います。本を買おうと思っても、読む時間があるか、内容は理解できるかなど迷うこともある。でも僕は、目の前の1冊に惹かれた「内なる自分」との出会いが、本を買うに値する価値だと思ってるんです。本を手にするには、本と自分との関連性を認めることだ。「音楽はサブスクでも聴けるけど、改行も挿絵の位置も変わってくる本は、そのよさを電子ですべてカバーできる訳ではなくて。情報として取り込むだけならいいけど、本を味わう」という意味で読書体験は変わってくる。だから、本は無くならないんです。そしてこう続けてくれた。「店の本棚はこれまでの自分の趣味や興味が反映されているのですが、これからはここを通じて得た刺激を投影しながら、多様なジャンルの本が有機的につながっていくように」と思っています。



高岡 浄邦さん

約7年「ヴィレッジヴァンガード」に勤務した後、会社員をしながら約10年前からインターネットで古本の販売を始める。知人の本屋での取り扱いや、イベント出店などを重ねながら、2022年7月に独立。県庁通りに本屋「scene」をオープンした。本と音楽をこよなく愛する生粋のカルチャー好き。

DATA 090-9485-5667 熊本市中央区神水1-2-8 輔仁会ビル202号 営業時間 18:00-22:00 (月~水曜)、11:00-19:00 (木~日曜) 定休日 第1・3金曜 ※不定休あり books_scene

